

2025年4月29日（火）9面（文化面）

遠く離れた場所とつながる

弘前れんが倉庫美術館

見聞録

個人主義が幅を利かせる現代にあって、つながりの中でしかわれわれは存在し得ない、と再確認させてくれるのが、弘前市の弘前れんが倉庫美術館で開催中の「ニュー・ユートピア」展だ。開館5周年記念として、同市出身の奈良美智の作品など所蔵品を軸に、市内で発掘された縄文時代の土偶や、津軽地方の伝統的な刺しゅう「こぎん刺し」が並

「ニュー・ユートピア」展

ぶ。

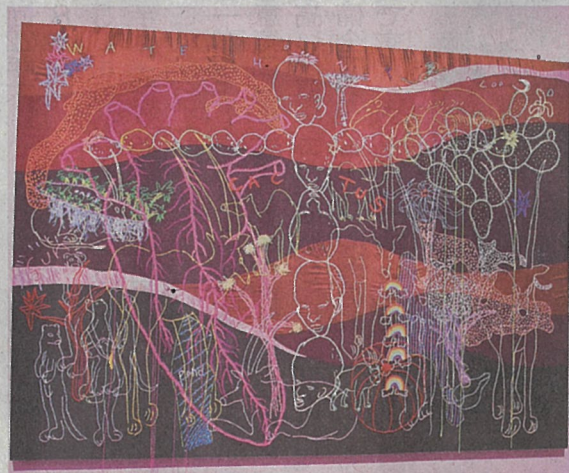
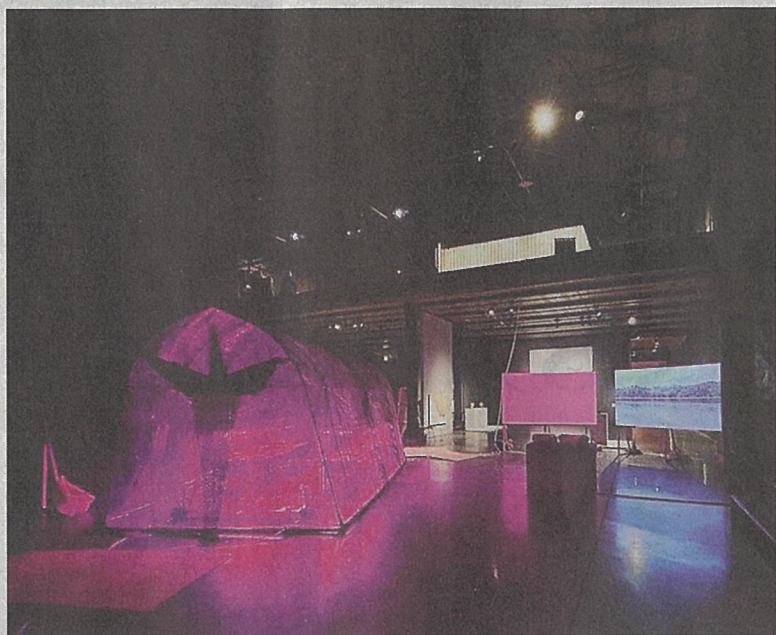
（こつ）聞くと、ゆかりの名品」を並べただけのよくある展示を思い浮かべるかもしれない。しかし、本展の面白さは、鑑賞者と弘前という土地を結びつける力にある。その引力を生み出しているのが、約100年前に建てられた建物を持つ歴史と、会場全体を緩やかにつなぐ渡辺志桜里と小林エリカの作品だ。

渡辺の「サンルーム（不在の部屋）」は植物や魚、バクテリアが育てられてい

る水槽をホースでつなぎ、生態系を可視化する作品。本展では、津軽地方にある東日本最古という水田遺構に着想を得て、稲を組み込んだ。大陸から伝わった本来「外来種」である稲を通して、他の場所や過去との連続性を表現した。

小林の作品は、弘前で生まれた父の人生と、陸軍の師団が置かれた軍都としての弘前の歴史を織り交ぜた文章などで構成され、会場に点在する。

2人の作品の力を借りると、無関係に思えた作品同士や、作品と自分との間につながりを感じられる。例えば川内理香子の大型の刺しゅう作品。川内は同



【写真上】渡辺志桜里の「サンルーム（不在の部屋）」。紫に光るビニールハウスで稲を育てている

【同下】川内理香子の刺しゅう作品「ACTUS（サボテン）」

作の制作中、おしゃべりを楽しみながら作業する女性たちを見て、「こういうところから物語や神話は生まれるのではないか」と思ったそう。それを念頭に、すぐ横に展示されているこぎん刺しを見ると、農村でだらんしながら針を動かす女性たちの姿が目につく。

こつした見方をしているうちに、この美術館を起点に、別の場所へと水平に伸びていく線と、過去と現在、未来を垂直に貫く線のイメージがわき上がってきた。その線上に他の人の暮らしもあると気づいた時、遠く離れたこの場所との確かなつながりを感じた。

（辻将邦・共同）

※「ニュー・ユートピア」展は、1期は7月7日まで、2期は7月11日から11月16日まで。